

尊敬や感謝の念が、行いや言葉に自然と表れるように、想いが伝わるような表現力を伸ばすことは大切であると考えています。

例えば、拍手。相手を心から称えるとき、両手で鳴らす音は自然と大きくなるものだと思います。司会者の「大きな拍手を送ろう」という声を聞かなくても、両手が自然と大きな音を出してくれる。ここには、「マナーだから」とか「言われたから」とかではなく、尊敬や感謝することの本質が、心の中に根付いているからです。

また、発表者や先生が「何か質問はありませんか」などと尋ねた時。発言してくれたことに対する感謝の気持ちが深いならば、手を挙げて応答したり、笑顔を送り返してあげたりするなど、想いがカタチとなって表されると思います。無反応で、じっとしていることは、勇気を出して発言や発表してくれた人に、寂しさや不快な思いをさせてしまいかねません。さらに、廊下で先生方を見かけた時、学校外で地域の方に出合った時、公共の場で発言を求められた時等、はっきりとした受け答えや挨拶の声は、相手に良い印象を与えるところです。経済学者であるケインズは、次の言葉を残しています。

「いかに善をなすよりも、いかに善であるかの方が大事である」

とても奥の深い言葉ですが、周囲にとらわれず、意識しなくても自然に善い行いができることが大事であると私は捉えています。

難しくとも、心がけていくことで、豊かな人間性が養われると思っています。